

くずし字学習とアクティブラーニング

※山田和人（同志社大学名誉教授／コテキリの会）

1 なぜ「くずし字学習とアクティブラーニング」なのか

なぜ「くずし字学習とアクティブラーニング」というテーマで話をするのか、最初にお断りしておきます。実は、わたくしは、2003年以降、同志社大学の社会連携型のPBL（プロジェクト・ベースド・ラーニング）教育の実践と研究を行ってきました。同時にわたくしの所属する国文学科の担当科目でもPBL型の学習を取り入れてきました（拙稿「君は何かできるようになったのかープロジェクト型チーム学習と初年次の導入教育ー」『学生・職員と創る大学教育ー大学を変えるFDとSDの新発想』ナカニシヤ出版、2012年2月）。【図1】

PBLの実践過程において学習者が自ら問題を発見し、そこから解決すべき課題を設定し、チームで実践していく協働的な学習のおもしろさに目覚めていく学生の学びのプロセスをすぐそばで観察してきました。なお、PBLは、自らオリジナルに課題を設定して、課題解決に取り組むという意味で、高次のアクティブラーニングと言えます。一方、日本近世文学会の広報企画委員・委員長を担当し、近世文学会が実施している出前授業（主に中高生対象）に関わるようになりました。出前授業等に関わる中で、くずし字学習とアクティブラーニングの親和性に気づくようになりました。

そこで、こうした出前授業を積極的に推進している仲間といっしょに科研申請をすることになりました。基盤研究(C)「興味関心を喚起するくずし字や和本を用いた新しい古典教材の開発に関する実践的研究」(代表山田和人)(2020

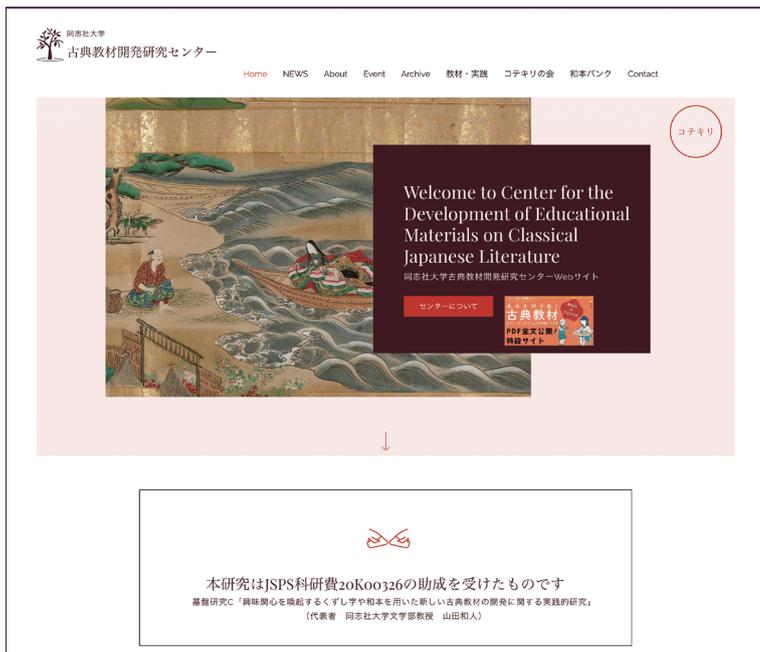
探究型学習
への関心

- 2003～2005 (学校法人同志社) 企業連携型理系人材育成PBL「ローム記念館プロジェクト」創案・運営委員 現代GP (2004)
- 2004～2005 文学部専門科目PBL 特殊演習(プロジェクト科目)
- 2006～2008 (社会連携型・テーマ公募制) 全学設置教養教育科目PBL「プロジェクト科目」創案・検討部会長 現代GP (2006)
- 2009～2018 同志社大学PBL推進支援センター長 教育GP (2009)
- 2008～2021 国文学科初年次演習PBL(課題発見・解決型プロジェクト学習としての「忠臣蔵検定」)
- 2021～2022 国文学科初年次演習PBL(子ども向けくずし字教材開発と研究)
- 2020～現在 古典教材の未来を切り拓く！研究会(コテキリの会) 代表
- 2021～2022 同志社大学古典教材開発研究センター 初代センター長
- 2021～2022「プロジェクト科目」「教科書に載っていない古典の魅力を探るくずし字教材の開発と実践」(2021)「伝統を未来へつなぐために古典籍の魅力子どもたちへ」(2022) (和本・くずし字による総合的アクティブラーニング学習の教材と教育方法の研究と実践)

～2023期間は申請時)が採択され、古典教材の開発と研究に取り組むことになりました。折しも、コロナ禍での船出となりました。

古典教育の現場で何が起きているのか、現場にこそ問いと答えが存在すると考え、古典教育の現状を踏まえて、新しい古典教材は何を目指していけばいいのか、現場の授業をいかに支援していくことができるのか、そこを見

図1



■ 図 2

しました。和本やくずし字を用いた新しい古典教材の開発はそうした現場のニーズを踏まえたものでありたい、そこで交換され、共有された方法や知見を共有財産として、古典教育へのひとつの切り口を提案することにつながっていきたいと思うようになりました。

同志社大学古典教材開発研究センターでは、古典に備わっている豊かな教材性を追求し、全国の古典文学・国語学・国語科教育の専門家や書誌学・文献学の専門家とも協力することで、子どもたちの古典への興味関心を喚起できるくずし字や和本を用いた新しい古典教材の開発と実践を目的として活動しています。

コテキリの会は、古典教材・古典教育について校種を越えた実践報告を中心に気楽に自在に意見交換できる研究会であり、古典教材開発研究センターは、そうした実践を踏まえて、それを理論化し、次のステップを目指しています。

古典教材開発研究センター研究集会は、今年3月24日(日)で4回目、コテキリの会としては8回目の開催となります。年に2回の意見交換の場を提供しています。

研究センターとコテキリの会の詳細は以下のホームページをご参照ください。【図2】

<https://kotekiri20.wixsite.com/cdemcjl>

こうした活動を行いながら、学部教育では、全学共通教養教育科目のプロジェクト科目で、学生によるくずし字教材の作成・模擬授業を行ったり、学生が和本の魅力を伝えるワークショップを企画したりする活動を支援してきました。また、国文学科の基礎演習(初年次演習)において、学生がくずし字教材の作成に取り組むPBL型の演習授業を担当しました。後述しますが、シンポジウムでは、後者のPBL型の初年次教育の実践例を紹介しました。以上のようなかたちで、PBL・アクティブラーニングとしての探究型学習に長年にわたり関心を持ってきました。和本やくずし字を用いた古典教材の開発や古典教育の実践と研究が、アクティブラーニングと極めて親和性が高いことに改めて気づかされました。

2 くずし字学習とアクティブラーニング

両者の親和性が高いとはどういうことか？

和本やくずし字を用いた授業では、グループワークやワークショップが積極的に取り込まれており、ふだん見た

きわめることが必要だと気づきました。

そうした考えから、上記の科研費をベースにして、2020年9月に古典教材の未来を切り拓く！研究会(コテキリの会は略称)第1回を開催し、2021年1月には、同志社大学古典教材開発研究センターを開設し、3月に第1回研究集会を開催しました。

コテキリの会の活動から刺激を受けるのは、小中高・高専・大学と教育機関の枠組みを超えて、それぞれの現場でどのような先進的な取組が行われているかを知ることの重要性に気づいたことでした。また、研究と教育という枠組みを越えて、議論する場を提供することで、新しい古典教材について幅広く議論していくことができるのではないかと確信



図 3-1、3-2

り、触れたりできない古典籍のリアリティーを実感しながら、グループで解読と読解を多角的・多層的に展開させることができます。和本との出会いは、未知の世界を垣間見る体験とも言えるでしょう。そこに書かれたくずし字をメンバーと協働して解き明かしていく喜びがあります。言い換えれば、多様な価値観との出会いによって、自ずと形成される、学びのコミュニティが深い学習をもたらすのでしょう。そこでは、自分自身の修得した知識やスキルを活かして、くずし字の解読・読解に取り組むことで、主体的・協働的な学び方を学ぶことができるようになります。和本やくずし字を用いた学習は、学習指導要領でも推奨されているアクティブ・ラーニング（「主体的・対話的で深い学び」等）に最適の教材と言えます。古典探究の絶好の教材とも言えます。こうした学びは大学進学後も、調査・分析・報告などに確実に役立ちます。【図 3-1、3-2】

近年、こうした和本やくずし字を用いた授業・学習が可能になる条件や環境が整ってきています。具体的にみていきましょう。

和本バンク～和本の貸出ができることをご存じでしょうか？

教室で使える和本がなければ、そのような授業を行うことはできません。和本に触れてみるところから始めるためには、和本が手元になければなりません。同志社大学古典教材開発研究センターでは、「和本バンク」の活動を行っています。日本近世文学会において、和本やくずし字を用いた和本リテラシー教育の普及のために、和本の寄贈を呼びかけ、賛同いただいた皆様から 200 点に及ぶ和本が集まりました。それらの整理を進めつつ、古典教材開発研究センターが所蔵している和本の無償貸出を行っています。下記の研究センターのサイトからお申し込むことができます。

<https://kotekiri20.wixsite.com/cdemcjl/wahonbank>

授業で使いたいと考えておられる古典作品及びそれに関連する和本を郵送して、教室で活用していただけます。「和本バンク」の和本を貸し出して、古典の授業の導入として利用した後に、生徒からの反応もよかったというコメントをお寄せいただいています。本物に触れるときめきと未知のものへの好奇心が子どもたちに貴重な体験として残るのでしょう。「和本バンク」の活動は、和本やくずし字を用いた授業を支援する草の根的な活動ですが、こうしたサービスがさらに充実していけば、和本やくずし字を用いた授業を試してみたいと思われる教員の授業支援の一助になるのではないかと考えています。和本の取扱いについては「和本の基礎知識」『未来を切り拓く古典教材』

<https://bungaku-report.com/kotekiri.html> (64 頁～73 頁) がコンパクトにまとまっており、授業で配布してす

ぐに使えます。

「和本バンク」については、加藤弓枝「教育現場への古典籍無償貸出プロジェクト「和本バンク」」(カレントウェアネス-E No.434 2022.05) <https://current.ndl.go.jp/e2487> をご参照ください。

教材データバンク～和本・くずし字の教材集があることをご存じでしょうか？

多忙を極める現場の教員にとって、くずし字教材の作成は時間的にもむずかしいのではないかと思います。何より試してみたいと思っても、くずし字教材のテキストもないのが現状です。そこで、同志社大学古典教材開発研究センターでは、和本・くずし字の入門・概説と、すぐに使えるくずし字教材集を刊行しました。『未来を切り拓く古典教材—和本・くずし字でこんな授業ができる』(文学通信、2023年3月)です。【図4】

第Ⅱ部教材編にくずし字教材を収録しています。短く一問で完結した、短時間で使用できるモジュール教材です。それらをオープンアクセスで自由にDL、利活用できるようにしています。次のURLから無料でダウンロードして、古典探究の授業の動機づけや新しい単元に入る前の導入教材、授業進度の調整のためのすき間時間等、授業展開に応じて利用できます。

<https://bungaku-report.com/kotekiri.html>

なお、モジュール教材については、同書の191頁を参照してください。

研究センターでは、教材データバンク(仮)を検討中であり、提供頂いた教材データを、教材プラットフォームで共有し、利活用できるような教育支援体制を整えていきたいと思っています。

一期一会の学びのインパクト～専門家に出前授業を頼めることをご存じでしょうか？

学校教育を社会へと開いていくことで、和本やくずし字のおもしろさを学習者に伝えることができるようになるかもしれません。学習指導要領でも、地域との連携などが推奨されています(総則において「家庭や地域社会との連携及び協働と学校間の連携」)。地域の博物館、資料館、図書館、公共施設などと連携していくことで、現場の教員の負担を軽減するとともに、こどもたちに新鮮な驚きと気づきを与えられるようになるかもしれません。たった一度の体験や経験が、深い学びへの誘いになる可能性を大切にしたいのです。一期一会の学びのインパクトは貴重です。はじめて和本を手にとってみる、触れてみるという体験をした子どもたちが、五感で感じて「不思議」を見つける喜びからか、わくわくした表情や振る舞いを目の当たりにすることがしばしばあります。

教授者が、専門的な知識やスキルを持っているとは限りません。ならば、ゲスト講師を依頼して、授業を担当してもらうのもいいのでは。これは教育現場の教員の負担軽減にも役立ちます。その場で専門家のアドバイスを受けることもできます。日本近世文学会では、和本リテラシー(和本やくずし字に関するリテラシー教育)の普及のために学会が教育機関から依頼を受けて、学会員が和本や教材プリントなどを準備し、教室等で出前授業を行い、それに関わる費用は学会が負担しています。

日本近世文学会のサイト「出前授業のあゆみ」から申し込むことができます。おもしろそうだなと思われた方はいつでもご連絡下さい。

<http://www.kinseibungakukai.com>

授業の進め方については、学校、学年、クラス担任と打合せをすることで対応できます。これも一期一会の学びの機会として活用してみてもどうでしょうか。



図4

デジタルデータの活用～こんなに便利になっていることをご存じでしょうか？

誰でもいつでもくずし字を学ぶことができる学習環境が整ってきていることも近年の大きな変化です。国立国会図書館デジタルコレクション、国文学研究資料館「国書データベース」、東京大学附属図書館コレクション、京都大学貴重資料デジタルアーカイブ、早稲田大学古典籍データベース、立命館大学アトリサーチセンター、同志社大学デジタルコレクションなど、古典籍のデジタルデータの公開が飛躍的に進みました。

これらによって、古典籍に圧倒的にアクセスしやすくなりました。なおかつ研究や教育に活用しやすい環境整備がなされ、教材として使用したり、共有したりすることが容易になりました。国会図書館デジタルコレクションのデータは、申請書などは不要で、公開にあたっては、出典を明記すれば教材として利用することができます。子どもたちが興味を持ちそうな教材として使用できるデジタルデータが手軽に入手できるようになりました。今後も、教材のICT化は進んでいくでしょう。教材に使ってほしいようぶだろうかという現場の不安がかなり軽減されてきています。

それによって、児童や生徒、学生が直接アクセスして、興味深い対象を見つけることもできるようになっています。まさにアクティブラーニングを実践できる環境が整いつつあると言えます。残念ながら、そのことが教育の現場で必ずしも共有されているとは言えません。学習者の自主的な学びを促進するために、こうしたデジタルデータを使わないのはかえってもったいない。三宅宏幸「古典籍のデジタルアーカイブ利用の一例」『未来を切り拓く古典教材』<https://bungaku-report.com/kotekiri.html> (104頁～108頁) が役に立ちます。

くずし字アプリの活用～くずし字アプリがあることをご存じでしょうか？

もうひとつ大きな学習環境の変化について触れておかなければなりません。それがくずし字アプリの登場です。解読（翻刻）はグループやチームで行う方が多様な角度から意見交換できるので、それぞれの個人の学習の深度も深くなります。その時に、解読に役立つツールがあると、心強いです。

近年は、KuLA、みを (miwo) など、くずし字の解読を支援してくれるツールが無償で提供されるようになっていきます。

KuLAは、五十音でかなを検索できます。「この字かな!？」と予測・推測ができた場合に、すぐにアプリを搭載したスマホの画面で解読が適切かどうか確かめることができます。外国の日本文学研究者の中には、分厚いくずし字字典から解放されたという人もいます。その意味でデジタル版くずし字字典とも言えます。ただし、字母数を比較的使用頻度の高いものに限っているので、精選されたデジタル版くずし字一覧と言ってもいいでしょう。

また、みを (miwo) はAIくずし字認識アプリです。くずし字で書かれた文や文章をスマホのカメラで撮影して、AIに認識させると、瞬時に解読（翻刻）してくれます。文字通り、解読を支援してくれる機能です。ただし、AIの認識が正しいとは限らないので、学習者が結果を読み直して、見直すことが必要です。学習者はその見直す過程で、くずし字の解読技術が上がっていきます。その意味では、二段階学習になっていると言えるでしょう。はじめて和本来に接する読者にとって、内容が、ほとんど見当が付かないことも多いので、そのような時に、みを (miwo) で撮影して、解読（翻刻）してみると、おおよそのことが理解できます。おおよそわかると、もう少し詳しく知りたくなるので、くずし字学習のモチベーションにもつながってきます。はじめてだからこそ、読んでみたいという意欲が高いとも言えるわけです。

なお、小中高の場合、タブレットにダウンロードできない場合は、「くずし字一覧表」を活用して、解読することもできます（『未来を切り拓く古典教材』付録）<https://bungaku-report.com/kotekiri.html>

- ・KuLAは以下のサイトからダウンロードすることができます。

<https://kula.honkoku.org/>

- ・みを (miwo) は以下のサイトからダウンロードすることができます。

<http://codh.rois.ac.jp/miwo/>

先に紹介した『未来を切り拓く古典教材』において、くずし字アプリとその利用方法について具体的に取り上げています。山田和人「くずし字学習の基礎知識」『未来を切り拓く古典教材』(96頁～103頁)が役に立ちます。

<https://bungaku-report.com/kotekiri.html>

もうひとつのアプリ「そあん soan」の利用

そあん (soan) は、みを (miwo) とは逆に、現代のことばや文章を、江戸時代の古活字本の書体に変換してくれます。自分たちで解読した本文をくずし字に変換してみることで、自分の学習成果がかたちになります。そして、そあんで変換された文章の最後に、自分の名前を署名してみてください。もちろん映える漢字とかなで書いて、そあんに変換してもらって世界に唯一の自分の古典になります。

ここから発展させて、自分の身近なものを、そあんで変換して作ったくずし字問題を仲間同士でお互いに出し合ってみるのはいかがでしょうか。当時は、まだそあんはなかったのですが、同志社大学の学生が「現古絵合わせカルタ」を制作し、現代のトピックや人物等を絵札と字札として、小学生高学年用のくずし字教材を制作しました(『未来を切り拓く古典教材』付録)。今なら、子どもたちが自作のイラストと、そあんが変換したくずし字で、さらにユニークなカードゲームを作ることもできるでしょう。<https://bungaku-report.com/kotekiri.html>

- ・そあん (soan) は以下のサイトからダウンロードすることができます。お試しください。

<http://codh.rois.ac.jp/soan/>

こんな取り組みが始まっています！

大学でも、大学院生や学部生の場合、所属するゼミや研究室がそうした社会的な活動に取り組み、その実績を社会に還元していく、いわば古典という文化遺産を文化資源として活用していく視点と方法を持つことで、次世代へつなげていく試みが少しずつ拡がりを持ちつつあることも事実です。それは広義の地域・社会連携教育とも言えるでしょう。成蹊大学の平野ゼミの歌占のプロジェクトはその好例と言えるでしょう。

<https://hirano-zemi.wixsite.com/website>

社会に対するインパクトを考えて、行動することも重要です。授業の中に限定したり、課外活動の枠組みに縛られることなく、学生の活動の振幅をできるだけ拡げていくことです。それによって、モチベーションを維持しながら、社会と大学や学校と継続的な関係を築いていくことができるのが、魅力です。そこで得られる学生の達成感と学びの充実は、かけがえのないものとして将来にわたって、自分自身の生き方に影響を及ぼしていきます。

たとえば、学生や生徒自身が和本やくずし字の学習教材を作ったり、そこで得た知識を生かしてゲームを作ったり、映像作品を制作したり、それらが学校や地域社会の役に立つ活動になるならば、やる気も出てくるでしょう。学びの場を学習者、教授者、地域社会がいっしょに形成していくことになっていきます。まさに学びのコミュニティが参加者を育てていきます。

3 コミュニケーションツールとしての近世文芸にも注目しては？

これはひとつの提案ですが、従来教科書には、古代と中世の古典作品がおおく採用されていますが、古代・中世と現代をつなぐ近世の文芸に注目してはどうでしょう。近世に普及した出版文化によって、古典が庶民のものとなり、多様なジャンルにおいて、古代・中世の作品がデフォルメされ、パロディー化され、多様で個性的な作品になっていきました。その意味では近世の文芸は、古典への架け橋として現代のわれわれに古典のおもしろさを伝える役割を果たしてくれています。いまや、近代の文芸も含めて考えてもいいでしょう。



■ 図5

『百人一首地口絵手本・後』 版本 全27丁 (国立国会図書館デジタルコレクション DOI: 10.11501/861695 です)。**【図5】**

<https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/861695/1/14>

具体的に見てみましょう。本文には、「おひしかるべきよはのすしかな」と記されています。現代のひらがなと異なるのは、「かるべき」の「か」と、「よはの」の「は」、「すし」の「す」、「かな」の「な」でしょう。それぞれ字母（ひらがなの元になった漢字）は、「か」は「可」、「は」は「八」、「す」は「春」、「な」は「那」です。字母が複数あることを知ればくずし字に強くなれます。なお、「かる」は「可」と「留」の二文字をつなげて書いており、これを連綿体と言いますが、くずし字の解読では、どこまでが一字かを判別するのにも馴れが必要です。

まず、絵に注目してみると、これは誰でもすし屋とわかります。となると、最初の「おいし」は、すしが美味しいの意味かと気づきます。男はおそらくすし屋の客でしょう。手に持っているのは畳まれた提灯ですから、時間は夜ですが、店の灯りがあるので提灯を畳んでいるのでしょう。いずれにせよ、夜ということになり、「よは」は夜半と解釈できます。ちょっとくだけた訳にしますと、「美味しいだろうよ、夜更けの寿司は（たまらねえ）」というような感じでしょうか。男のおどけたような顔も親しみを覚えます。

実は、この本文は、百人一首六十八番の「心にもあらでうき世にながらへばこひしかるべきよはの月かな」の下句を置き換えて、すし屋の客の心情に変化させているのです。

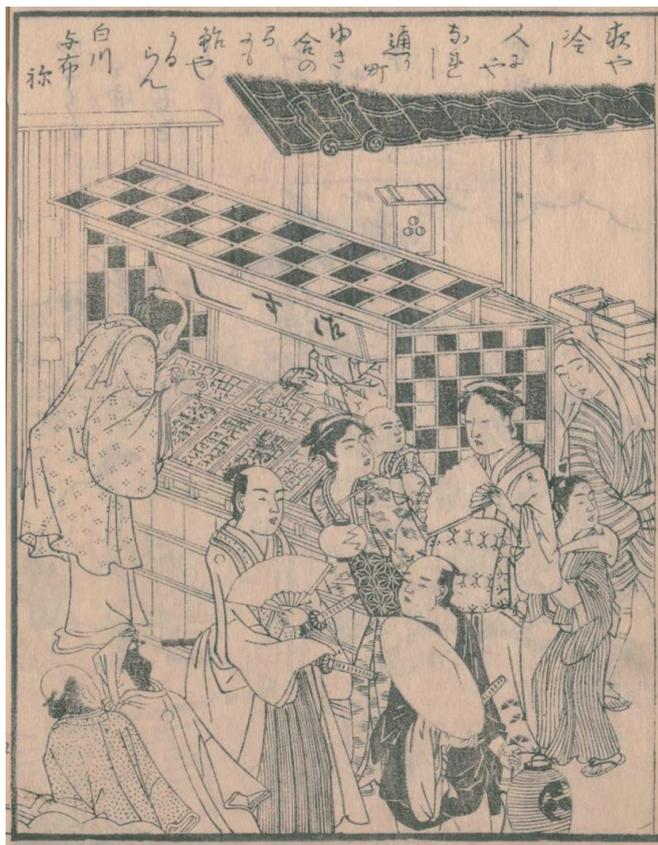
それがわかるのは、絵の右端に「三條院」として、その上に68番の下句「こひしかるべきよはの月かな」が枠で囲われています。これが六十八番の歌であることがわからなくても、これが下敷きになっていることはすぐわかります。しかも、「こひし」の「こ」と「おいし」の「お」を置き換え、最後の「月かな」の「月（つき）」を「すし」に置き換えていることがわかります。二文字、二音を置き換えるだけで、まったく異なる趣の歌に仕上がっています。

六十八番の歌は、時の摂政藤原道長によって、三條院（後冷泉院第二皇子居貞（おきさだ・いやさだ）親王）は在位6年で退位させられた、その辛い心情を「（本当は死んでしまいたいぐらいだが、）心ならずも生きながらえていたな

変換の妙味～たとえば、百人一首のパロディー教材はいかがでしょう？

初学者にとって、おもしろさを喚起する作品として、百人一首のパロディーの例を取り上げてみましょう。これらは大学生や中高生、さらには社会人に向けて実践した教材です。

シンポジウム当日は、「百人一首で遊ぶ」と題して紹介しました。小学校や中学校では、授業の中で『小倉百人一首』を暗誦しているところが多く、百人一首は最も身近な古典のひとつと言えるでしょう。その「百人一首で遊ぶ」というのはどういうことか。それは、上の句や下の句の一部を別の言葉と入れ替えて、自分たちに身近な新しい味わいの歌に変換して楽しむおもしろさの追究と言えます。滑稽をねらった作品も多いです。数文字を置き換えるだけで、まったく異なった内容に変化したり、人物や状況が大きく変わったりしています。そうした置き換えのおもしろさを楽しんだのでしょう（武藤禎夫『江戸のパロディー もじり百人一首を読む』（東京堂出版1998）もおもしろい！）。もちろん、百人一首のパロディーは実に多彩なヴァリエーションがあります。この問題の素材は、



■ 図 6

らば、恋しく思い出されてくるだろう、この夜更けの月が」と歌っています。この辛い思いの歌を、すし屋の客の心情に置き換えたおもしろさをにやりと笑いながら楽しんだのでしょうか。おそらく一日働いて、やっと楽しみにしていたすしを食べに来た客の心情に共感していたのでしょうか。このように日常の一コマを切り取って、おもしろおかしい歌に変換する意外性が、生徒や学生に受けるのでしょうか。学習者同士のコミュニケーションが促進され、活発な対話が展開されます。

このように江戸時代・近世の作品は古典を現代につながるコミュニケーションツールになることがおわかりいただけるでしょう。挿絵の楽しさも親近感を高めることとなります。

こんなふうには探究学習につながるかも？

絵を見る限り、現代の寿司屋とはだいぶ雰囲気が違います。屋台のように見えます。実は、当時の江戸の寿司屋は屋台形式でした。両国、浅草などの繁華街に出店していました。客もいわゆる立ち食いだったわけです。参考までに『絵本吾妻挾』（えほんあずまから

げ）（内題『絵本江戸爵』（えほんえどすずめ）三 全 28 丁（寛政 7 年（1797））（国立国会図書館デジタルコレクション DOI：10.11501/2554973 <https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/2554973/1/14>）等を参照すると明らかです。【図 6】

挿絵の右端には寿司を屋台から宴席等へ運ぶ配達人の姿が描かれています。こうした挿絵を紹介すると、古典の世界が身近に感じられてくるのではないのでしょうか。まさに古典を現代につなげるコミュニケーションツールとして、百人一首のパロディーがくずし字教材の可能性を開いてくれるように思います。国語や社会あるいは歴史、美術などにまたがる調べ学習にもなります。

ここに掲げた例は、絵と文字がひとつになっており、相互にヒントになるように作られています。それぞれ短い作品なので、一目で全体を見通すことができます。さらに一ひねりして、意外な答えを引き出す問いかけの工夫が随所に見られます。解く側の知的好奇心に訴える教材と言えるでしょう。だからこそ学習者の興味、関心を引き出し、さまざまな角度から対話が促進され、学びが深まっていくのでしょうか。興味のある方は、後の「資料篇 1・2」を参照してください。

4 大学の初年次教育とくずし字教材の制作 くずし字教材を作ってみよう！

ここから大学の初年次教育における学生が作るくずし字教材とアクティブラーニングについて紹介します。同志社大学文学部国文学科の 2022 年度基礎演習（必修）（1 年次の秋学期クラス）での取り組みです。子どもたちが古典に興味を持つことができるようにするためのくずし字教材を作成するという課題を設定し、自由に材料を選んで問題と正解・解説を作成して、実際に現場の授業で使ってもらおうことを目指そうというテーマを設定しました。できるだけ臨場感、リアリティーを持つことができる条件と環境を設定することが大切だと考えるからです。別の言い方をすれば、教材作りを通して社会とつながっていることをイメージして取り組むことで、学習者自身のモチベー

ションアップにつなげるというねらいがあります。

大学に入学したところと言っていい新入生を対象にした初年次教育クラス（22名前後）です。履修生は昨年まで高校生ですから、大学で学ぶとはどういうことかを学ぶのが大きな目標です。そのために必要な知識や情報、スキルを実践的に学んでいきます。今回は、実際に教育現場で使ってもらうことを前提にした、問題と解説を作ることを通して、解がひとつとは限らない問いに向き合うことのおもしろさとしんどさを体験することが目標です。こうした問題発見、課題解決型の探究型の授業に期待されているのは、学習者が主体的に問いと向き合い、課題を適切に設定し、それを解決するために取り組む姿勢が求められています。大学生でも、卒業論文でテーマや仮説を適切に立てることが苦手な学生も多く、卒業論文等で苦勞することが多いという実感があります。もう少し早くから、こうした探究型の学習スタイル、学び方を知っておくと、大学進学後も研究や実験・実習・調査などに前向きに取り組むことができるような気がします。

一年次生にくずし字教材を作れるのか

今回は学習者自身がくずし字教材を作成するのですが、履修生はくずし字を学習した経験は皆無です。また、和本来に触れた経験となると全員がほぼゼロです。こうした中で、はたしてくずし字教材を作ることができるのかと思うのは当然でしょう。学生たちも、漠然とした不安とわずかながらの期待で困惑しています。もちろん、自分で問題と解説を作った経験ありません。

そこで、まず古典の授業について話し合う時間を設けました。自分自身の受けた古典の授業について率直に語り合うところからスタートします。教える側からすると耳が痛いようなことも多いです。が、過去の出来事ですし、お互いの高校生活を知っているわけでもないの、言いたい放題に問題点を指摘します。生徒の不満はおおよそ推測がつくと思います。文法重視の解釈に終始する暗記型の授業に魅力を感じないとか、受験に必要なだから最低限の知識を効率よく覚えればじゅうぶんだとか。ただし、古典そのもののおもしろさに気づかせてくれた先生の存在は大きく、それで古典のおもしろさがわかったという生徒もいるというのも事実です。総じて、古典の授業はおもしろくないが、古典はそれほど嫌いとか、おもしろくないとかいうことではなさそうです。ならば、自分たちで古典のおもしろさを伝えるような教材を作ってみてはどうだろうかと持ちかけてみます。これは履修生が国文学科の新入生だからこそその問いかけです。教職希望の学生もいますので。

授業の流れ（全15回）

最初の3回で学習環境を整えます。その後は、基本的にチームのミーティングが中心です。「議事録」（ミーティング後週2回）「活動記録」（週1回）「自己評価表」、プレゼンテーション（中間・最終の2回）と成果物（くずし字教材）で評価します。なお、提出物はすべてe-class（学習支援システム）にアップします（誰でも閲覧可）。

ポイントはチーム全員が同じテーマで、一人ひとりが、古典に興味を持てるような個性的なくずし字教材を作成できるように工夫すること、素材選びは基本的に本人の選択を尊重すること、くずし字アプリの実践的活用法やデジタルデータの使い方についての効果的なレクチャーの工夫をすること、最も重要なのは、チーム全員で活動しなければならない仕掛けを作るように心がけることです。

なお、中間発表で自分が作りたい問題の具体的な素材をプレゼンすることで、クラスの履修生の反応や評価を確認し、このまま進めるか、素材を変更するか、あるいは部分的に修正していけばいいのか、自分自身で判断します。その後、最終発表に向けて具体的な問題作りに進んでいきます。何度でも仕切り直しができること、修正ができること、そうしたゆとりがあることを伝えるようにしています。

授業の流れ（全15回）は以下の通りです。

01 回目 授業のねらい説明 & 高校の古典の授業ひと言 & 自己紹介

毎週1回の「活動記録」とミーティング毎の「議事録」提出の通知（ポートフォリオ）

02 回目 和本体験（30点）& くずし字アプリ DL・試用（「興味・関心シート」に和本体験の感想）

公開デジタルデータ DL サイトで素材探し（国会・国文研・早稲田・ARC）

03 回目 チーム編成（10分間で、5チーム各4～5名。チームは男女混合）発表日程、チーム名、チームルール・授業外ミーティング（MTG）（毎週1回）の曜日・時間の決定。実質的なキックオフ。次回までに授業外 MTG でチームの仮テーマを相談してくる宿題。

04 回目 チーム毎に授業内 MTG（ミーティング）。仮テーマと関連づけた個人のくずし字素材を DL サイトから選定する。教材イメージを検討する。

05 回目 チーム毎に授業内 MTG

06 回目 チーム毎に授業内 MTG

07 回目 中間発表 教材の素材提示（全チーム、テーマ説明1分、個人発表各自2分程度、質疑応答）発表形式自由

08 回目 チーム毎に授業内 MTG

09 回目 チーム毎に授業内 MTG

10 回目 チーム毎に授業内 MTG

11 回目 チーム毎に授業内 MTG

12 回目 最終発表 教材提示（2チーム）（プリント配布1分・テーマ説明1分、個人発表各自3分、まとめ1分。その後チーム毎に質疑応答15分程度）

13 回目 最終発表 教材提示（2チーム）

14 回目 最終発表 教材提示（1チーム）

最終回振り返りの方法解説。「自己評価表」15回目前日までに e-class にアップ。自己評価と相互評価。

15 回目 振り返り（評価会） ベストチーム賞・ベストプレゼンター賞決定。

初年次の学生が作ったくずし字教材！

履修生 A、B の二つの事例について最初にコメントを添えておきます。

履修生 A は、料理に興味を持っていると当初から話していました。古典籍の中に料理のレシピを扱ったものもあるということを伝え、国文学研究資料館のサイトを紹介しました。あとは本人がリサーチし、その結果を踏まえてチーム内のミーティングで作成しました。くずし字学習の教材として、自分の興味を持っている料理本のレシピとどうつなげていくか、工夫を重ねました。古典籍は多様であり、従来の国語の領域を越えてしまいます。それも文化遺産としての、言語文化としての古典籍のおもしろさとして受け止めるべきです。すべての問題の中で、この問題がベストプレゼンター賞を受賞しました。実は、取り扱ったのがカステラのレシピ「カステイラの法」でした（『四季献立／會席料理秘囊抄』池田／東島／主人 編、文久3（1863）、1冊 54/58 コマ、国文学研究資料館、DOI10.20730/200022042）。
<https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/200022042/54?ln=ja>

これには、「精進カステイラの法」も取り扱われています。精進カステラは、卵が使えないので山芋で代用しています。

他の履修生からも最も評価されたのは、実際に江戸時代のレシピに従って作ってみたこと、そのプロセスを撮影して画像をヒントに生かしたことでした。何より本人が楽しんで課題に取り組んでいる姿勢が共感を呼んだのでしょう。別の言い方をすれば、くずし字を解読し、実際に作ることで読解した内容を検証するところまで追究した点が評価されたのでしょう。ちなみに、精進カステラは美味しかったですかという質問に、まずかったと答えて、笑いを誘っていました。文学研究では、料理を切り口にした研究もできるということを実感したのではないでしょ

うか。【図7】

履修生 B は子ども好きなので、小学校高学年向けのくずし字教材を作りたいと言っていました。この素材は、『家財繁栄抄』二巻のなかから選定しました（十返舎一九作〔他〕、文政10〔1827〕、1冊 5/28 コマ（国立国会図書館デジタルコレクション DOI10.11501/10301072）。<https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/10301072/1/5>

おもしろいのは、下半分のパロディー和歌ではなく、上半分の絵柄が組み込まれたくずし字とその出典探しのおもしろさに注目したことです。小学校高学年という年齢の子どもを対象にして作るのに、難易度設定を考えた点が工夫と言えるでしょう。はたしてその年齢に見あうかどうかは別にして、江戸時代のクイズとしてのおもしろみを引き出そうとしました。「かに（蟹）はそと（外）、ふぐ（河豚）はうち（内）」は「鬼は外、福は内」のもじりであること。節分の時期などに教材として使うとおもしろいのではないのでしょうか。「いさきいさき、なに（何）見てはぜる」は「ウサギウサギ何見てはねる」のもじりで、いさきとは何か調べてみたくなります。童謡の一節であることを今の小学生が知っているかどうかはわかりませんが、ちょっとひねった問題としておもしろいかもしれません。

この問題は、ベストプレゼンター賞第二位でした。おそらく、小学校高学年という絞り込みと子どもに解いてもらいたいという出題者の意欲に共感が集まったのでしょう。【図8】

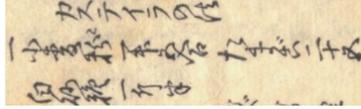
これら以外にも、多様な問題が作成されました。『道化百人一首』、『犬百人一首』、『猫のしばい』、『かちかち山』を最後に掲げておきます（資料篇3）。おもしろいものがあれば、ご利用ください。履修生には公開することを断っています。

昨年まで高校生だった新入生が、対象とねらいを明確にして、自分自身の興味や関心を起点にして問題を立てることができるようになったことに成長を感じます。何より自分自身の課題に正面から向き合い、未知だった和本やくずし字を通して、自分自身の古典を発見できたことが一番の成長でしょう。条件が整えば、高校生にもこうした教材作りができるかもしれません。夏休みの課題とか。

自らが出題者として唯一無二の問いを立てることで、より深い学習へと学習者を導いてくれるかもしれません。まさに探究のおもしろさを味わうことができるのではないのでしょうか。

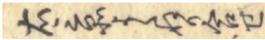
Q&A

これは江戸時代のレシピ本に収録されているカステラのレシピである。くずし字を読み空欄を埋めて、レシピを完成させよう。

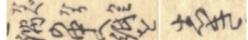


カステラの法

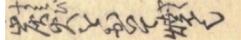
① () 一升五合 ② () 二十五
白砂糖二斤半



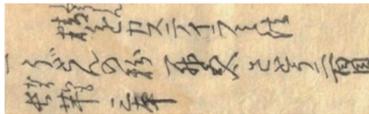
右三品よくねり合せ



鍋の中へ紙を (③) き

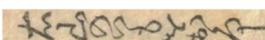


炭火をおいて焼也



精進カステラの法

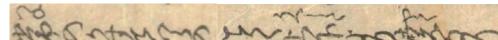
うどんの粉一升五合 さとう二百目
④ () 三本



右山のいもをおろし



うどんの粉にさとうすりませ



常の (⑤) のことく上下より焼なり

解答 ①小麦粉 ②たまご ③し ④長芋 ⑤かすていら

ねらい

- ・ 中学1, 2年生を対象として出題する。
- ・ カステラという現代でも身近なお菓子のレシピから出題することで、くずし字で書かれた文を身近に感じてもらう。
- ・ お菓子の材料や工程の中で現代と共通する語句から出題し、答えを予想しやすくする。
- ・ このレシピ本は古典単語の知識もあまり必要がないので文の意味が理解しやすい。

指導の留意点

- ・ 指導の流れ：この教材は江戸時代のカステラのレシピだと説明し、問題を解いてもらう。問題のヒントとして、現代のカステラの材料、作り方を示す。解いた後は完成したレシピを読み、現代のレシピと比較する。
現代のカステラのレシピ（参考：DELISH KITCHEN、Kurasiru）
材料：小麦粉、砂糖、卵、はちみつ
型にクッキングシートを敷き、オーブンを予熱しておく→卵を溶き、砂糖とはちみつを加えて混ぜる→小麦粉を加え混ぜる→型に生地を流し込み、オーブンで焼く
- ・ 精進カステラの問題を解く際は、精進料理について説明する。
精進料理とは、仏道修行をする人が食べる、肉や魚のような動物由来の食材を使わない料理である。仏教では動物を食べることが禁止されており、卵も食べられないため今回の精進カステラは卵を使わずに作られている。卵の代わりに長芋が使われている。
- ・ 現代のレシピとの違いについて
完成した江戸時代のレシピを読んでもみると、今の私たちが知っているカステラのレシピとほとんど同じ作り方だとわかる。異なるのは最後の生地を焼く方法で、昔は上下両方から火にかけている。これは現代でいうオーブンと同じ方法である。

参考文献

- ・ 青木直己『図説 和菓子の歴史』2017年8月 筑摩書房
- ・ 関沢まゆみ 編『日本の食文化6 菓子と果物』2019年11月 吉川弘文館
- ・ 小林里穂 監修「精進料理に使えないNG食材とは？肉や魚だけじゃなかった！」
オリーブオイルをひとまわし編集部 2020年7月
<https://www.olive-hitomawashi.com/column/2020/07/ng-40.html>
- ・ 「基本のカステラ」 DELISH KITCHEN
<https://delishkitchen.tv/recipes/183964505707905382>
- ・ 「ふわふわカステラ レシピ・作り方」 Kurasiru
<https://www.kurashiru.com/recipes/0939839b-b228-4dd3-a954-abf9607aa38c>

使用した古典籍URL

四季献立 會席料理秘囊抄 <https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200022042/viewer/54>

【図8】 履修生Bの教材

Q&A

次の資料は十返舎一九の「荒神奉納家財繫栄抄」といい、かまどの神様に家庭が栄えることを祈って捧げたものです。有名なフレーズをもじった言葉遊びが書かれています。

問題

1 次の①②の図のフレーズの中に、絵に描かれた生き物が隠れています。どの部分に隠れているか探してみましょう。

2 次の①②の図の文字を読んでどんな言葉遊びになっているか考えてみましょう。

①



②



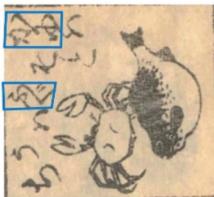
ヒント

- ①は2月3日に使うことばです。
- ②は音楽の授業で登場することばです。

解答

1

①



②



- ① 「かに」はそと「ふぐ」はうち
- ② 「いさぎいさぎ」なにをみて「はぜ」る

2

- ①かにはそとふぐはうち 「おにはそとふくはうち」をもじったもの
- ②いさぎいさぎなにをみてはぜる 「うさぎうさぎなにみてはねる」をもじったもの

ねらい

小学校高学年くらいの生徒を対象とし、くずし字に初めて触れる機会に使いたい。生徒の記憶に残りやすいものにしたく、聞きなじみのある、語呂の良い言葉を出題した。また実際に声に出して読むことで、くずし字と言葉遊びの楽しい記憶を結び付けられると考えた。自分で読んだという経験が、中学校で古典を学ぶ際のとっかかりになるようにしたい。

指導の留意点

はじめは、ゲーム性を持たせるために生き物の名前を探してもらおう。その際に②の「いさぎ」の繰り返し符号「く」の説明を行う。その次にフレーズを丸々読んでもらい、何てフレーズをもじったものなのかを考えてもらおう。答え合わせの後、実際にフレーズを口に出して読むことで、記憶に残りやすくする。

①かにはそとふぐはうち 「おに」 ↓ 「かに」 「ふく」 ↓ 「ふぐ」

「おにはそとふぐはうち」をもじったもの。

おには外 福は内：節分の夜の豆まぎのときに唱えることば。鬼は外に出て行け、福は入って来いという意味。

②いさぎいさぎなにをみてはぜる 「うさぎ」 ↓ 「いさぎ」 「はね」 ↓ 「はぜ」

「うさぎうさぎなにをみてはねる」をもじったもの。

うさぎうさぎなにを見て跳ねる十五夜お月様見て跳ねる

：童謡「うさぎ」の歌詞。作曲者、作詞者は不明。うさぎに問いかけ、返事をするような形になっている。実は月が主題で、天体気象のわらべ唄。江戸時代から既にあったとされ、明治時代から音楽の教科書に載っている。

(イサキとハゼは共にスズキ目の魚)

素材画像『家財繫栄抄』 URL

国書データベース

<https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/100249557/4?ln=ja>

参考文献

『日本国語大辞典 第二版』 (2000年12月・2002年12月)

日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編 株式会社小学館)

『故事俗信ことわざ大辞典』(1982年2月22日 尚学図書編 株式会社小学館)

『日本童謡事典』(2005年9月7日 上笙一郎 編 株式会社東京堂出版)

資料篇

1 「漢字で遊ぼう」

判じ物の事例をひとつ紹介しましょう。これは、いわば「漢字であそぼう」ということで、漢字の部首を補うと、いつもの漢字になるという判じ物です。漢字学習の教材にもなります。

最初は「勝」という漢字に関する教材です。【図9】小学校高学年から使えるレベル設定です。最初にこの判じ物

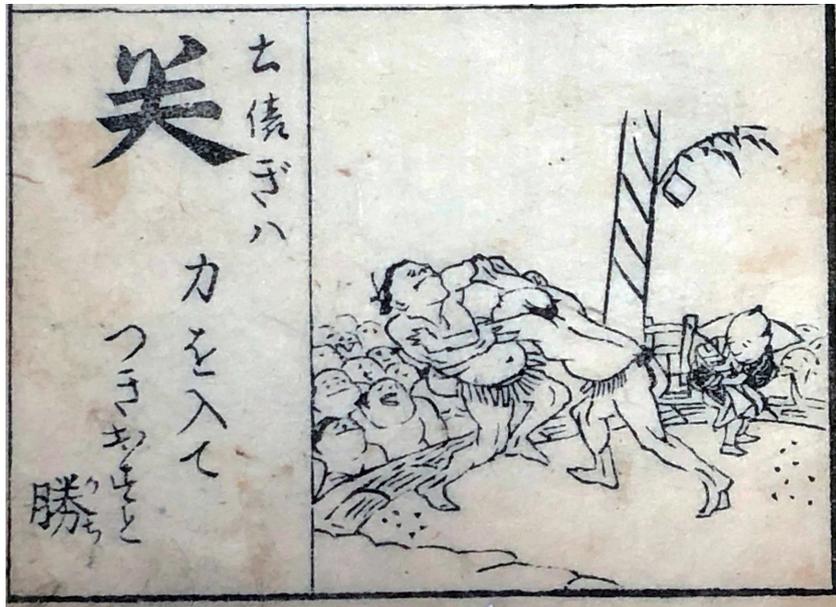


図9

が、絵と文字が一体になっていることを説明し、問題となる漢字の一部のふりがな（土俵ぎは）がヒントになっていること、その下の説明（「力を入れてつき出すと勝」）の意味を考えると、旁（つくり）の下に「力」を入れ、漢字の一部の偏（へん）に「月」を入れると、「勝」という漢字ができあがるという判じ物であることがわかります。絵を見ると力士がふたり相撲をとっています。右の力士が左の力士を土俵際まで追い詰めて、突き出そうとしています。そこから、説明の「力を入れてつき出す」と解説できます。「出」が漢字ですから読みにくいかもしれませんが、絵から推測

できるところがおもしろいわけです。ちなみに KuLA の草書体漢字で検索してみると用例が出てきます。これは、『どんじ御はんじ』（鈍字集）（国文学研究資料館国書データベース <https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200004531/viewer/7>）で公開されています。同じ本が、同志社大学文学部国文学科にも所蔵されており、所蔵本には『どんじしう』（鈍字集）とあります。同書については、改めて翻刻、紹介したいと思います。

もう一例同書からピックアップしてみましょう。こちらは「動」という漢字に関する判じ物です。【図10】同じ



図10

要領で、「動」の漢字の一部のふりがなが「うごかぬ」と読めるかどうか、「か」が「可」のくずし字であると、まだわからなくても問題ありません。漢字の一部の下の説明「重ければこれにもきつと力を入ると動（ルビに「うごく」とある）」から、重いけれどぐつと力を入れるというのは、「動」の偏が「重」であり、そこに旁（つくり）として「力」を入れると、「動」の漢字になるわけです。絵を見ると「ヤ、ソントまかせと」とあり、よいしょと力一杯大きな石を持ち上げようとする男と、その様子を見て「あがらんはい」

とはやしている男が描かれています。「これにもきつと力を入ると」には、文字通り大石を動かそうと、力を入れてぐっと持ち上げようとする様子に漢字の部首を掛けておかしみを出しています。

「漢字で遊ぼう」というテーマの判じ物を楽しみながら、くずし字を読み取っていくことでモチベーションを上げていく遊戯性に富んだ教材になっています。

2 「謎かけで遊ぼう」

次に謎かけを紹介しておきましょう。

江戸時代に楽しまれた言語遊戯の代表格のひとつが謎かけでしょう。謎かけと言えば、笑点などで御馴染の、「○トかけて ○トとく 心は○○」という形式の謎かけです。ただし、江戸時代の謎かけの本は、絵を伴っており、絵がヒントにもなっているのが特徴です。それを踏まえて、ひとつ解いてみましょう。【図11】「あさきのさの字トかけて 十五夜(や)の月(つき)トとく 心はあきの中(なか)だ」。「あさき」の「さ」の字は、「あ」と「き」の間にあることがポイント、十五夜の月は中秋の名月、旧暦七、八、九月の真ん中の八月十五日で「中」となる。



図 11



図 12

そのわけは、「あき」は「あさき」の中にあり、中秋の名月から秋の「中」ということになり、「あきの中だ」が謎解きです。最後の絵柄に、中秋の名月に因んで「すすき」と「月見団子」が描かれているのもヒントになります。

もう一例紹介します。

「日本橋トかけて しょうぶがたなトとく 心は人のきれることがない」。【図12】橋の欄干と富士山から日本橋と推測できます。「しょうぶがたな」は菖蒲刀のことで、端午の節句に菖蒲の葉を刀に見立てて男児が腰に差した木立のことを指します。そのわけは、「人のきれることがない」というのは、日本橋はいつも賑わって人通りがきれることがないのと、菖蒲刀では人を切ることはできないのを掛けていることとなります。

これらの謎かけの典拠は、『教訓謎々春の雪』（天保16年（1845））（早稲田大学古典籍総合データベース、【図11】【図12】）

https://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/he09/he09_04228/he09_04228_p0017.jpg

https://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/he09/he09_04228/he09_04228_p0010.jpg

です。謎かけの形式は、三段に絵と文字が組み合わされて、おり、絵がヒントになっています。「人のきれることがない」は、日本橋は人通りが多いので、ひっきりなしに通行人が行き来して、人がきれることがない、菖蒲の葉を刀に見立てた木立では人を切ることはできない、ということで、絵には人通りが多い様が描かれているのがヒントになるわけです。こうした謎かけの本は、手を替え品を替え板行されています。江戸時代にも大変人気があったのでしょうか。

3 初年次学生の制作したくずし字教材

くずし字教材の4点を以下に掲げます。おもしろいものがあれば、アレンジしてお使いください。【図13～16】

日本文学基礎演習最終発表

1 問題 □にひらがなを入れ、左の和歌を翻刻し解釈せよ。



伊勢
 なに□□□
 □じ□□あし□
 ふし□ま□
 あ□で此よを
 □ぐしてよ
 とや

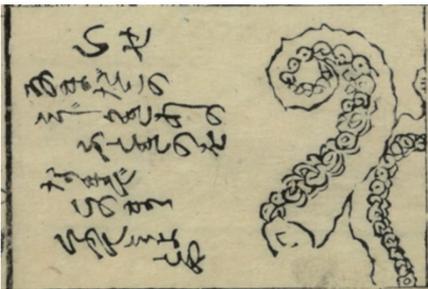
解答

伊勢
 なにはがた
 みじかきあしの
 ふしのまも
 あはで此よを
 すぐしてよ
 とや

字母

伊勢
 なに者可多
 三じ可起あし乃
 ふし能ま毛
 あ者で此よを
 春ぐしてよ
 とや

2 問題 左の和歌は、右の和歌をもとにして作られた替歌(パロディ)である。右の和歌で使用されているものと同じくずし字もある。翻刻せよ。



解答

いせ
 なまだこの
 みじかきあしの
 ふとぎのを
 なまで
 このまゝ
 くふてみよ
 とや

便宜上、1の和歌を①、2の和歌を②と記す。

ねらい：生徒にくずし字と和歌に興味を持ってもらい、楽しみながら古典知識をつける。
指導の留意点：高校一年生を対象とする。授業の進め方は以下の通りである。

①について

・翻刻の答え合わせの際には、「の」のくずし字には「能」と「乃」の二通りがあることを生徒と確認し、一つのひらがなにいくつかのくずし字があるということを示す。

・また、①では「は」の字母が「者」となっているが、漢文において「者」は日本語の助詞「は」に相当することを学習する。

・和歌の解釈では、「あはで」の「で」が打消しの助詞であるという古典文法や、「このよ」の「よ」が「世」と「節」の掛詞であるなどの和歌の修辞を学習する。

②について

・翻刻の答え合わせを行ったあとに和歌の解釈もする。

・資料である『道化百人一首』では作者の名はもとの百人一首と同じであるため、「たこ」と地名である「伊勢」を掛けたわけではない。

・②は現在のひらがなと同じものも多いが、「み」と「か」、「なまたこ」の「な」のくずし字を確認する。問題にも書いているが「み」と「か」については①の和歌にも用いられていることを指摘する。「な」のくずし字については生徒に字母を予想させる。

・②が①から「みじかきあしの」をそのまま引用しているように、生徒に百人一首の和歌からどこかの句を一句以上用いて百人一首のパロディを作らせる。以下の和歌が使いやすいと思われるため、現代語訳を共に載せたプリントを配布する。以下の和歌以外の百人一首のパロディでも可とする。

23 月見れば ちぢにもものこそ 悲しけれ わが身一つの 秋にはあらねど

26 小倉山 峰のもみち葉 心あらば 今ひとたびの みゆき待たなむ

70 さびしさに 宿を立ち出でて ながむれば いづこも同じ 秋の夕暮れ

引用

① 早稲田大学 古典籍総合データベース

『よみくせ井二百人一首絵抄三十六人哥仙』 苗村泰軒 撰

https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/i04/i04_03163_0211/index.html

② 早稲田大学 古典籍総合データベース

『道化百人一首』

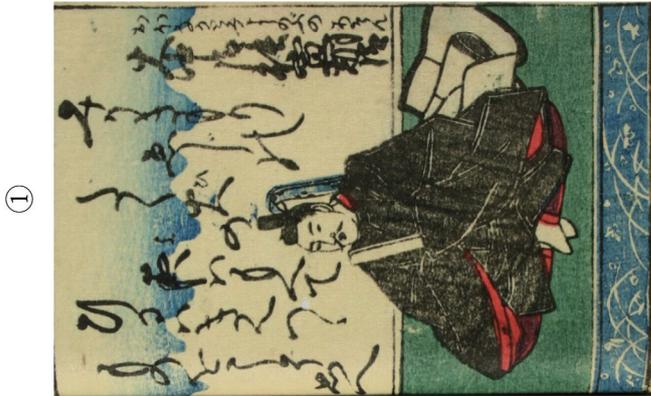
https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/bunko31/bunko31_e0212/index.html

日本文学基礎演習

くずし字を読もう！

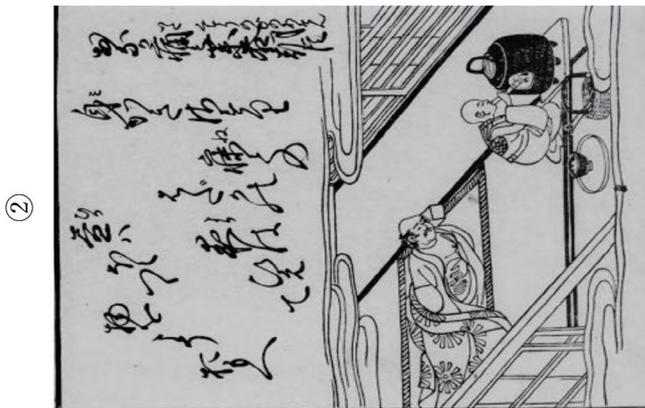
練習問題 ①の短歌の読み方を次のイ〜ニから選んで丸をつけよう。

- イ みかのはら 湧きて流るるいづみ川 いつみきとてか 恋しかるらん
- ロ みちのくの しのぶもちずり 誰ゆゑに 乱れそめにし 我ならなくに
- ハ みかきもり ゑじのたく火の 夜はもへて ひるはきえつつ ものをこそ思へ
- ニ みよしのの 山の秋風 さよふけて ふるさと寒く ころもうつなり

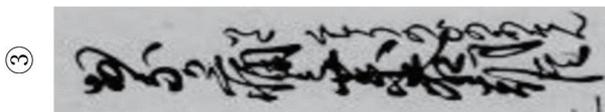


大中臣能宣朝臣(おおなかとみよしのぶのあそん)によつて詠まれた歌。夜は盛んに燃えているが昼には消えてしまう衛士の燃やす篝火を、自身の悩ましい恋心になぞらえたもの。

応用問題 ②の短歌は①の短歌をもじつたものである。練習問題で読んだくずし字を参考に読み、次の吹き出し中にある()を埋めよう。



朝臣は()の状態で寝床にねころび、身体を掻いたりさすったりしているので、夜は()、昼は()、思い悩んでいる。



この人名には漢字が含まれる。横に振つてあるルビにも注目して読んでみよう！

()

解答 練習問題 ハ

応用問題 ②はだか／寝冷えをして／痛くてわめきつつ ③おなか痛み薬呑朝臣

◇ねらい

この教材は難易度に幅があり、応用問題に関しては思考力と根気を要するため、中学生以上を主な対象としている。単にくずし字を読むだけでなく、練習問題で身につけたものを応用問題に活かす体験をさせることで、生徒の学習意欲を増長させると同時に、くずし字を「古い時代の難解な文字」ではなく「親しみやすい記号のようなもの」として取り組めるようにした。応用問題については、自由度の高い穴埋め形式を採用し、厳密な読解よりも内容理解に重点を置くことで、二つの和歌の内容を比較する面白さをより吟味できるよう工夫した。また、教材には入りきらなかった、もとの歌のできた時代背景や犬百人一首の説明を加え、古くから残る筆跡をそのまま解読できるようになるという醍醐味を知ってもらいたい。

◇指導の留意点

・練習問題が終わった段階で、画像内におけるどの文字が現代ではどの文字に相当するかを大まかに理解してもらおう（字母の概念や踊り字で表記されている「つつ」についてはここで説明する）。練習問題と応用問題を見比べ、同じ形の文字を確認し、印をつけるなどするとよい。応用問題には、初見で読むのは困難である上にもとの歌に含まれていない文字がいくつか登場するため、くずし字一覧表を見ながら見つけ出してもらいたい。

・問題演習は4〜5人のペアワークで行う。特に応用問題については積極的に話し合い、「朝臣がお腹をさすりながら寝ており、俣らしき人が火を焚いている」という状況の理解に辿り着くと、多角的に問題を見ることができ、解釈がよりスムーズに行われるだろう。

・最終問題は、歌人名をもじったものの厳密な読解を求めるもので、前の二つの問題に比べて難易度が高いため、教員側が積極的にヒントを与えてほしい。もとの歌の歌人名である「大中臣能宣朝臣（おおなかとみよしのぶのあそん）」と音声的に関連があることや、②で解釈したものを踏襲した名前になっていることを伝えるとよい。

・解き終わった後に、改めてもとの歌ともじり歌を比較し、同じ昼夜の対比でも内容が全く別のものに入れ替わっているという面白さに気が付けるとよい。また、音読などを通して韻を踏んでいる箇所を確認することで音としての楽しさも実感できる。

参考文献

早稲田大学古典籍総合データベース『小倉百人一首』四十三頁目

(https://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/bunko30/bunko30_d0156/bunko30_d0156.pdf)

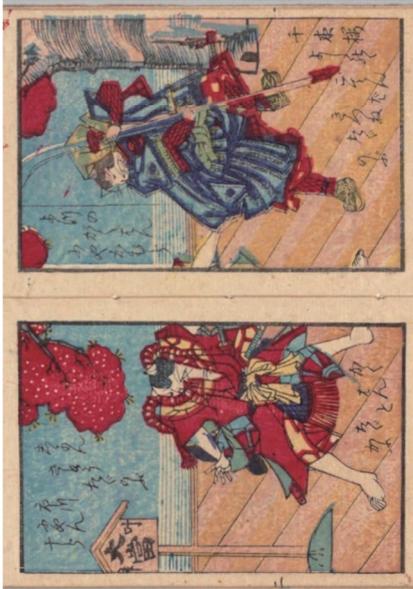
国立国会図書館デジタルコレクション『犬百人一首』コマ番号 28

(<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/932185>)

。日本文学基礎演習期末レポート

問題 役者の名前を当ててみよう

左の絵は明治時代に描かれた『猫のしばい』という絵本の一部です。猫たちが『義経千本桜』という作品を演じている様子を描いたこの絵本にはそれぞれの役を演じる猫たちの名前が書かれています。左図の二匹の猫の名前を読み解いてみましょう。



① 横川のがくはん (横川覚範) 役
(名前:)

② さとうただのぶ (佐藤忠信) 役
(名前:)



ヒント

左記は当時から有名な歌舞伎役者の名前です。

中村芝翫 (なかむらしかん)

市川團十郎 (いちかわだんじゅうろう)

ねらい

問題として出題している部分は比較的読み取りやすいため子供たちが自力でくずし字を読み取るという体験をすることができる。また、猫の役者の名前は有名な歌舞伎役者のもじりであり、猫であることを表現するために名前の一部を「にゃ」や「にゃん」といった鳴き声に置き換えるというやり方は現代でもしばしば用いられている。この教材を使用することで難しい印象を受けがちなくずし字やそれを使っていた時代の人々に対して親近感を持ってもらい、今後の学習につなげていきたい。

留意点

- ・この教材はくずし字を見たことがない子供たちが本題の昔話の教材に入る前のウォーミングアップ、もしくは有名な昔話を少し読解した後、初めて自力での読解を行うための練習問題等に適している。
- ・市川にゃん十郎の「郎」の字が漢字のくずし字表記のため他の部分に比べて読解しづらい。読み取れていない子供が多いようであればヒントを参考に促したり、漢字であることを伝える必要がある。
- ・子供たちの年齢によっては市川團十郎や中村芝翫の名前を知らない可能性があるため現在市川團十郎が十三代目、中村芝翫が八代目であることなどの情報を交えながら授業を行う必要がある。
- ・比較的簡単な問題であり、取っ掛かりさえできれば二問まとめて解けてしまうためグループワークよりも個人で取り組む形にした方が良い。子供たちの問題の進行状況を適宜見て回りながらヒント等を出す必要があると考えられる。

本文翻刻

- ① よ川のがくはん にやかむらしかん
- ② さとうたらのぶ 市川にゃん十郎

参考資料

『【お伽噺】猫のしぼい』（国立国会図書館デジタルコレクションより引用）

(<https://dl.ndl.go.jp/pid/1168021/1/1>)

『義経千本桜』について（日本芸術文化振興会文化デジタルライブラリー）

(<https://www2.ntj.jac.go.jp/dglib/>)

【ねらい】

色鮮やかな挿絵と誰もが知っていると考えられる昔話を教材にすることで、くずし字に対するハードルを下げ、楽しく古典を学ぶ足がかりとなる。本文全てを読み解くのは難しいため単語の穴埋め形式にした。問題はあらずじとリード文を読めばある程度誰でも推測できるレベルであるため、子供たちに「読めた！」という達成感を感じてもらうことが出来ると考えられる。この教材を通して、子供たちに少しでも古典に興味を持ってもらうことを目指す。

【指導の留意点】

- ・「かちかち山」の概要を子供たちが知っているか確認する。もし、知っている人があまりにも少なかった場合は口頭でも少し説明する。
- ・今の「かちかち山」は当初の話をかなり変えたものとなっているため江戸時代から現代までのストーリーの変遷について軽く説明する。（おばあさんが殺される場面やたぬきが泥舟で溺れるシーンがその残虐性から脚色が加えられていることなど）
- ・残虐な場面は子供たちの教育に悪いということから排除された。しかし、実は当初の話には自然と人間の関係が描かれている。人間であるおじいさんは畑をたぬきに荒らされ、怒るが、その山は元々たぬきの住処であったはずで、その場所を壊したのは人間である。残虐と言われ、無くなった場面には「人間の残虐さ」が描かれており、「人間とは他の動物の犠牲なしでは生きていけない」というメッセージが込められているとも言える。子供達と昔話の改変について話し合うことで道徳の勉強も同時にすることができると考える。

・本文現代語訳

①、②

今の音は何の音だ、とたぬきが聞くとうさぎはここはかちかち山である、と答えた。

③、④

うさぎはよろこび、唐辛子味噌を準備してたぬきの見舞いに行った。

【参考文献】

- ・宮田伊助『「お伽噺」かちかち山』p.6(国立国会図書館デジタルコレクション)
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1167998>
- ・沼賀美奈子(2001)『江戸時代から現代までの「かちかち山」の絵本の変遷』